

新しい時代に向けた、深い学び

新学習指導要領において、「主体的・対話的で深い学び」の実現が挙げられています。しかし、「深い学びのイメージがつかみにくい」という声をよく耳にします。今号の特集では、これからの時代に必要な「深い学び」について考えます。

対談

深い学びの
先にあるもの

「深い学び」とは何なのか、その先に何があるのか——。
さまざまな授業実践を行っている、甲斐先生・植田先生の対談を通して、「深い学び」のすがたに迫っていきます。

もっている力だけで勝負しない

甲斐 「深い学び」といっても、ちょっと

イメージが湧きづらいですね。生徒は、自分のもっている力だけで勝負しているときはすらすると文字を書き、スムーズに話をします。ところが、今もっている自分の力では太刀打ちできないときには、立ち止まって頭を抱え、言葉を本気で探します。言い方がたどたどしくても、そこには確かに「深い学び」があると感ずることがあります。ですから、授業をする際は、難しさと苦労を乗り越え、それを喜ぶことができます。そのような学習の流れを作りたいと思っています。それができたときは、「深い学び」につながっているような実感がありますね。

植田 生徒のもっている力はそれぞれだからこそ、甲斐先生は「もっている力だけで勝負しない」ということを常に意識されていますよね。できる生徒は、教師の喜ぶ答えをわかっている対応しますので、答えの形を整えるのが上手になるだけで終わらせたくないという気持ちは、私ももっています。ですから、言葉を紡いでいく中での試

行錯誤や葛藤を通して、生徒自身の中でのブラッシュアップを図れるといいなと思っています。

甲斐 形を整えることが悪いわけではないのですが、形が整うまでのプロセスをきちんと見たいと思います。一つの答えに向かっていくことも「苦労」には違いないのですが、どこへ向かって行けばいいのかわからないくらいの困難さも必要だと思っています。

植田 求められているものが見えているからこそ、学びも直線的になってしまいう傾向はあると思います。でも、そこにたどり着くこと自体が目的にならないようにしたいですね。甲斐先生と通じるところもありますが、私は、生徒が自分の力の未熟さを自覚し、自身に足りない力を獲得するために、それぞれが学びを追究していく過程で、深さが生まれると考えています。

ただ、「深い学び」がゴールではなく、それによって得られるものが大切ですね。

甲斐 生徒が苦労しながら試行錯誤をし、問いを立てて生まれてきた本当の言葉が大切で、それが深さにつながっていくのでは

ないでしょうか。ですから、授業中は生徒とたくさん対話をするようにしています。

そうすると、生徒のもっている言葉の世界みたいなものの輪郭が見えてきます。何かを書いたり、話したりしているときに、その生徒の本当の言葉がどうかがわかってくるんです。

植田 それぞれの生徒の学習の実態を見ていて、それが甲斐先生の頭の中に入っているからこそ、本当の言葉がどうかわかるんですね。

甲斐 生徒一人一人と本気で対話をすることを考えたうえで、授業を組み立てていくので、生徒たちの実態をつかむチャンスは多いですね。そうやって本気で生徒たちと対話をしているからこそ、形だけ整えようとした語彙はわかりますし、無理して使うとしている語彙もわかります。その過程で、「学びの深さ」も感知できるようになるのだと思います。

植田 生徒を理解することなくして「深い学び」に向かわせることはできませんね。

甲斐 本当にそうですね。



甲斐利恵子
×
植田恭子

撮影：長岡博史

自分の言葉にこだわって

植田 甲斐先生は、作品のよさを語り合うという文学教材の実践をされていますが、そこでは生徒一人一人が全て自分のこととして、作品を語っていました。

甲斐 一人一人がその作品に対して自分の意見が言えると、どうしてそう考えたのか、という疑問が自然と湧いてくるので、対話的な授業になっていきますね。

植田 表現やテーマなど、生徒の視点や切り口もさまざまですね。その作品と生徒それぞれが対話して、そこから獲得した言葉を、自分の言葉で紡ぎ出し、共有していくことで、語彙も増えますし、学びも深まっています。

甲斐 これは文学教材だけでなく、説明文教材を読むときにも生きると思います。冒頭部分の筆者の問題提起や主張を読み解いていくプロセスでも、「構成」「作者の意図」「読者」「表現」「効果」など、文学で培ってきた語彙も役立ちます。

植田 文学の語彙、説明文の語彙と分かれているのではなく、作品と向き合うとき

の語彙として、それぞれが獲得していくですね。

甲斐 そうなんです。獲得した語彙は作品を読むときだけでなく、日常生活の中でも使われます。そのようにして、生徒は無意識のうちにさまざまな場面で獲得した語彙を使いながら、学びを深めていっているのだと思います。

植田 語彙を獲得すると日常生活が豊かなり、学びも深まる。そうやって教科を超えたところで良い連鎖が生まれていくような気がしますね。

甲斐 そうですね。そうやって「深い学び」を経験した生徒の身体の中には、自分の言葉が深いか浅いかを判断するためのセンサーができていくような気もしています。

植田 甲斐先生の教室の生徒たちは、「この言葉だとダメだな」「これは使い古された言葉だな」「自分の言葉じゃないな」ということがわかるんですか。

甲斐 「誰に言っても通じる言葉は、誰の心にも届かない」ということは常に意識させるようにしているんです。どんな言葉で表すかという苦勞をしない限り、人の心に

届く言葉を生み出す力はつかないし、自分の心も育たないと伝えていきます。生徒たちも言葉には敏感な身体になってきていると思います。

植田 授業を通して、言語感覚が育っているのは素晴らしいです。

甲斐 生徒たちが普段の会話でも「語感が良くない」「プラスイメージの言葉を使ったらほうがいい」などと話している様子を見ると、日常生活でも少しは言語感覚を磨いていけるようになっていきますね。

学ぶ価値を実感してほしい

植田 「深い学び」に誘うためには、学びから逃避することのないよう、「学ぶ価値や意味」を実感する課題設定を大切にしたいと考えています。

甲斐 教えてもらったことに比べ、自分たちで苦勞して学んだことは、鮮明に記憶として残ります。そういう学びが多ければいいほど、「学ぶ価値」を感じられますよね。自分を認める、自己肯定感を生むというか、そういう経験は頭というより、身体に染み込みやすいと思います。

かいいえこ

甲斐利恵子

福岡県生まれ。東京都港区立赤坂中学校教諭。光村図書中学校『国語』教科書編集委員。専門は国語科単元学習。著書に、『子どもの情景』（共著・光村教育図書）、『聞き手話し手を育てる』、『中学校国語授業づくりの基礎・基本』（ともに共著・東洋館出版社）など。



植田 「深い学び」はそれぞれの生徒の内にあるもので、そういった経験は大切ですね。学びの結果ではなく、学びの過程にこそ深さはあると思います。それは甲斐先生のおっしゃるように生徒と真に対話することでしか生まれてこないと考えています。だからこそ、先生と生徒の信頼関係や個々の学びを感じ取るセンサーは大切ですね。

甲斐 そうですね、生徒のもっている力というのはそれぞれ違うので、学びの深さもそれぞれ違ってきます。「ここまでできたから深い」ではなく、その生徒が「どうやって困難を克服しようと努力していたか」が重要で、植田先生のおっしゃる通り、深さを決めるのは、結果ではなくて過程だと思っています。ですから、普段から生徒たちのことをよく知り、学びの過程をよく見ることは大切ですね。

「深い学び」はすぐ手の届くところに

植田 「深い学び」を考えるうえで、問いを立てて自分なりに探究していくという、問題発見・解決のプロセスも重要です。

植田恭子

うえだきょうこ

和歌山県生まれ。都留文科大学非常勤講師。日本NIE学会常任理事。元大阪市立昭和中学校指導教諭。1990年代からNIEに力を入れる。著書に『情報リテラシー——言葉に立ち止まる国語の授業』（共著・明治図書）など。



習なのですが、問いを立てる力だけでなく、問いを吟味することで物語の背景を理解することにものつながりました。友達の書いた文章を読み合うことも「深い学び」につながったと思います。

自分事として情報と向き合う

植田 そういった授業だと、自然と作品との対話ができますね。私の場合、問いを立てて考えるときには、情報活用能力が大切ではないかと思っています。安居總子先生（※1）が昭和四十六年に出版された情報活用に關する論文（※2）には、①情報操作能力として考える ②主体性を育てる ③個から出発する の三点が情報化社会での国語科学習指導において大切だと書かれています。これは今の時代にも求められていることではないでしょうか。

甲斐 どのような実践をされているのですか。

植田 例えば、教科書の教材とリンクさせるような形で、時宜を得た今日的な課題と、今ある教科書の課題を併せて読ませるような実践をしています。その中で自分だけで

はなく情報とも向き合い、それを活用するプロセスの中で、学ぶ価値を実感してほしいと思っています。

甲斐 以前伺った植田先生の「時代を生きる一九四五」という実践は、胸に迫るものがありましたね。自分と向き合うことについて考えさせられました。

植田 中学二年生の一月から三年生の九月までという、とても長い帯単元でした。当時はちょうど戦後七十年で、戦争に関するさまざまな情報があふれていたのですが、戦争を過去の歴史的事実として受け止めるだけでなく、主体的に情報を活用し平和について自分なりの考えをもたせたいと思っていました。生徒一人に一台のタブレット端末がある環境だったので、教育用SNSを活用し、架空の当時の人物になりきって書き込みをしていくという授業を行いました。これによって、生徒は当事者意識をもって、自分事として主体的に情報と向き合い、社会的な課題について自分なりの考えをもち、発信していくことにつながりました。

甲斐 自分事として捉えるというのは、ど

んな学習場面であっても非常に大切ですね。当時を知るための資料は、どのように用意されたのでしょうか。

植田 まず、みんなで情報を共有するデータベースを作りました。その他にも「EBS for School」や新聞社のデータベースなども活用し、さまざまな資料を用意しました。そうやって複数の情報を重ねていく中で、生徒それぞれが自分なりに情報と向き合っていました。

私も、京都に住んでいる十四歳の和菓子屋の長女になりきって、先行して書き込みをしていきました。ひたすら掲示板に書き込むような形なので、情報交流する場を設定することも意識しました。

甲斐 初めは知識も情報も少ないので、書き込みの内容が薄い状態でしたが、だんだん一人の人間としての厚みが感じられる内容になっていきましたよね。

植田 最初の書き込みの段階では、名前と住んでいる場所、家族構成の情報くらいしかありませんでした。ですが、それぞれの生徒がその地域に関する情報を自分で獲得していくこうとするので、表現や内容がどん

問いを立てて考える
大人になれた、弟たちに――

友だちの作品

なげ「うち」なのが。命を失ったのはヒロ
コキや他にも数人の娘が死んでいったのだろ
う。その他にも、父親や母親、祖父に祖母、
友達、自分の飼っていた犬や猫、家や町、お
争はそれらの「命」を奪った。

大人になれた、弟たちに――

アメリカの飛行機が日本に爆弾を落こしに
来た時僕はどんな感情で見たのか。青い空
は平和の象徴だが戦争の空は違った。いつ命
が危度になるのかわからない戦争では少しの
油断も許してはならない。それが戦争である。

僕が弟のミルクの人の人だ時とんが氣持ちに
ただらうか。戦年の時は食へ物成たさ人あ
ろわけではない。それなのに僕は弟のミルク
をだま。ての人でいた。僕は、弟が栄養失調
で死んだ時にさ、と複雑な氣持をださう。

3

た	な	の	り	い	け	た
い	ぜ	が	い	ち	ど	い
も	弟	ミ	だ	う	争	い
の	の	ル	う	け	の	も
戦	大	リ	け	ー	時	争
年	切	ほ	と	キ	の	の
合	な	っ	っ	の	ミ	合
べ	ミ	を	も	方	ル	べ
物	リ	飲	甘	何	は	物
の	を	ん	い	倍	だ	の
数	し	人	は	も	れ	数
字	ま	は	ま	甘	出	字
で	っ			い	る	で
も	た			だ	は	も
あ					飲	あ
た						た

№0.1

甲斐　そうですね、特に読みの教材では
問いを立てる力が必要だと思っています。
何事においても常に問うということは、一
年生のときから意識していますね。

例えば、「ダイコンは大きな根?」(二年)で学ぶのは、ダイコンの上の部分と下の部分の辛みの違いというよりも、「ダイコン」という身近な野菜を通して、文章の書かれ方そのものの工夫について、自分の考えをもつことですよね。筆者はどうしてこの構成にしたのか、なぜこの言葉を使ったのか、そういったことを自身に問いながら読んでいくと、簡単そうに見えた文章も結構難しいんですね。

このように、教材が難しいから学びが深まるのではなくて、先生や生徒がその文章にどういう姿勢で向き合うかによって、深さが生まれるのだと思います。そう考えると、「深い学び」というのは、すぐ手の届くところにあつて、そんなに難しいことではないという気がするんです。

植田 終わりのない問いを探究する喜びを味わうと、それは「一生もの」になります。ぜひ中学校の段階で、そのしんどさと、し

んどさを乗り越えた先にある楽しさやおもしろさ、高みを目指すことの意味と意義を実感させたいですね。

甲斐 本当に「深い学び」を経験すると、生徒はその手ごたえのおもしろさに気づき、実生活の中でも自然と活用していきますよね。一度でもこのおもしろさを実感し、自分の中から言葉が生まれる感覚を体感すると、生徒たちはそうでない学びに、もの足りなさを覚えるのではないでしょうか。「深い学び」の喜びを身体が覚えているので、中学校を卒業した後にも生きてきます。

例えば、社会人になって社内で議論しているとき、議論の浅さに気づくことができる、その問いの立て方で本当にいい答えが出せるのかと、問い自体を吟味したりすることができはります。

植田 まさに生きて働く言葉の力ですね。

甲斐 「ダイコンは大きな根？」の他にも
一年生の前期に「大人になれなかった弟た
ちに……」（一年）を使って、問いを立て
て考える実践を行いました。物語に関して
自分なりの問いを立て、それに対して自ら
百字以内で答える、というコンパクトな学

どん深くなっていました。

甲斐 確かに最初は誰にでも通じる、誰にでも書ける内容だったのに、どんどん具体的に詳しくなっていましたよね。生徒の頭に情報をキャッチするアンテナが立っているような印象を受けました。その情報の質と量を植田先生が刺激し続けられたことで、深みが増したように思います。生徒どうして情報共有する場があったのも、「深い学び」につながっていましたよね。

植田 「学年をまたぐ」「教育用のSNS」という点では、ある意味冒険でしたが、生徒たちが無自覚のうちに情報の活用と共有を通して、戦争に対する考えを深めていたので、単元のねらいは達成できたのではないかなと思っています。

甲斐 他にも植田先生は学校図書館やICT機器を使った実践をたくさんされていますよね。

植田 先日、大学で「生きる」（谷川俊太郎）の後に句を続けた連句をグループで作り、それを群読し、詩の授業づくりについて考えました。その際の情報収集ではタブレットを活用しています。「生きる」の場

合、Youtubeに朗読や群読の動画がたくさんアップされているので、非常に参考になります。他にも「雨」というキーワードで詩のアンソロジーを作る授業をしましたが、このときも図書館やタブレットを活用して、多様な情報と出会えるようにしました。

甲斐先生は今こういった授業をされているのでしょうか。

甲斐 教科書も含めて、『声に出して読みたい論語』（齋藤孝／草思社文庫）の中から一つの章句を選び、同じものを選んだ生徒たちがパネリストになって、フロアも交えて語り合うという授業をしています。論語は自分事として語りやすく、中学三年生にはぴったりの学習材だと思います。

植田 自分事として捉えたうえで、生徒どうしが学び合っているわけですね。

甲斐 授業づくりでは、生徒たちが本気で取り組みたいと思うような準備が必要です。論語も自分の価値観・経験・失敗談などを交えて語り合えるような手引きを作りました。一人一人の心の中に話したいことがいっぱいあるという準備をし、和やかな雰囲気の中で語り合えるように工夫しました。

のアドバイスを取り入れることも大切ですが、「自分はこういう授業をしたい」という思いが、授業をつくる原動力になるのではないのでしょうか。初めは難しいと思うので、70%は指導書、30%は自分の工夫、というように挑戦してみると、自分がどういう授業をやりたいのかが見えてくるかもしれません。

生徒が学びを自分事として捉えることが大切という話をしましたが、それは先生も一緒に、授業を自分事として捉え、自分の責任において、楽しいことや自分の好きなものを取り入れて授業をつくってみることで、授業改善のスタートになるのではないかなと思います。国語科は他教科に比べて、授業の形が明確ではない分、工夫の余地があるので、挑戦のしがいやおもしろさもあるはずですよ。「こういうふうに授業を始めたからおもしろそうだ」「こういう物を使ってみたらどうだろう」「読書会をやってみたい」というように、生徒たちが生き生きと学ぶ姿を想像して楽しい気分が授業づくりをしてみてください。

植田 自由裁量の側面があるので、国語っ

て先生にとって楽しい教科ですよ。

甲斐 もちろん、同じ学年を担当している先生どうして連携する必要もありますが、先生が違えば、同じ教材でも授業の形は異なるはずですよ。ですから、もっと自由にやってみてほしいと思います。自分が楽しくなかったら、生徒たちも楽しむことができませんし、こちらが本気でなければ、生徒も本気で取り組んでくれません。「こうしなければならぬ」という考えは一旦置いておいて、一学期に一回くらいは自分の好きなものを題材にした単元をやってみてほしいのではないのでしょうか。「深い学び」とは一体何なのかと、問うことも大事ですし、考えることもとても重要です。けれど、頭で考えると同時に、生徒たち一人一人がどうやって生き生きと学ぶ姿を見せてくれるのかを考えて、挑戦することで、案外「深い学び」は見えてくるのではないのでしょうか。

植田 甲斐先生はこの対談の冒頭で「もっている力だけで勝負しない」ということをおっしゃっていました。先生にもそうやってどんどん高みを目指していく中で、しなやかに変化できる力をつけていってほ

植田 そうやって学習を積み重ねていく過程で、学びの深まりを実感できる場の設定は大事ですね。

授業づくりも自分事として

植田 若い先生方へのアドバイスをお願いします。

甲斐 いい授業をつくるために、指導書や学習指導要領をよく読むこと、先輩や書籍

しいですね。そういった授業づくりを進めていくことで、また違った教室風景も見えてくるかもしれません。



学びの質を高める！
ICTで変える国語授業
—基礎スキル&活用ガイドブック—
野中 潤 編著
明治図書／2019年

国語授業を変えるICT活用の事例を多数収録。「第3章 実践！ICTを取り入れた国語授業づくり」において、植田恭子先生の「時代を生きる1945」を紹介。



「学び」をひらく国語教室
安居 総子 著
東洋館出版社／1997年

安居総子先生の1971年から1996年までの教育実践を通しての提案をまとめている。「第2章学びをひらく」にこの対談で紹介した「情報化時代の国語科学習指導」を収録。

